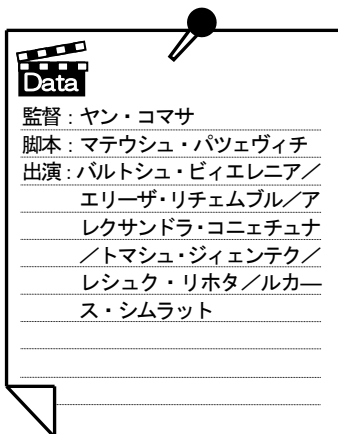




みどころ

何とも思わせぶりの邦題の本作は、小説・映画・ミュージカルで有名な『レ・ミゼラブル』と同じ(?)、「なりすまし」もの。ジャン・バルジャンの物語は「小さな盗み」から始まったが、やっと少年院を仮退院できたダニエルの「僕は司祭だ」という小さな嘘から始まった本作の物語は?

『パラサイト 半地下の家族』(19年)、『ペイン・アンド・グロリー』(19年)と並んで、アカデミー国際長編映画賞にノミネートされた本作は、人口の9割がキリスト教徒というポーランドならではの物語だが、そのすごさは日本人にもわかるはずだ。

ミサの在り方や神父の役割等の知識不足は横に置き、“なりすまし神父”がいかにして“カリスマ神父”になっていくのかに注目!そして、クライマックスでは、その崩壊のサマと主人公のあっと驚く行動をしっかりと確認したい。

■聖人?悪人?ポーランド発の“すごい映画”が降臨!■

邦題を『聖なる犯罪者』とした本作のチラシには、「聖人か?それとも悪人か?過去を偽り聖職者として生きる男——。実話をもとに描かれた衝撃の問題作」とあり、さらに「人殺しの私は、嘘を重ねながら奇跡を待ち続ける」とある。また、1981年生まれのヤン・コマサ監督によるポーランド発の本作は、第22回ポーランド映画賞で11部門を受賞した他、第92回アカデミー賞でも、ボン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』やペドロ・アルモドバル監督の『ペイン・アンド・グロリー』と肩を並べて、国際長編映画賞にノミネートされたそうだから、本来大きな話題になって当然の映画だ。

本作の主人公は、第2級殺人罪で少年院に入れられ、更生のための労働やカウンセリングを受けている20歳のダニエル(バルトシュ・ビエレニア)だが、チラシを見れば、

本作のストーリーはきっと、この男が過去を偽って聖人として生きていくもの。それが分かればもう観なくてもいいやと一瞬思ったが、「実話から生まれた衝撃作」に惹かれて鑑賞することに。その結果、日本にも降臨してきたポーランド発のすごい映画にビックリ！

■□■神父になるには？犯罪者には神学校の入学資格なし！？■□■

人口の約9割がカトリックの信者だというポーランドでは、第2級殺人罪のダニエルや弟を殺されたためダニエルに強烈な恨みを抱いているボース等が収容されている少年院でも、定期的にミサが行われているらしい。そして、今は敬虔なカトリック信者となっているダニエルは、トマシュ神父（ルカース・シムラット）の信頼を得てミサのまとめ役を任されていた。仮釈放の日が近づいているダニエルはトマシュ神父に対して「神父になりたい」と自分の夢を語ったが、神父からは「犯罪歴のある者は神学校への入学資格はない。」「良い行いがしたいなら、他にもたくさん道はある」と言われてしまった。しかし、それってホント？なぜ、そこまで神学校と神父の資格を規制する必要があるの？

それはともかく、仮退院し遠く離れた田舎の村にある製材所で働くことになったダニエルは、トマシュ神父との間で「お酒も薬物もやらない」と固く約束したが、その後のスクリーン上には、酒、女、クスリで遊びまくるダニエルの姿が登場するからアレレ……。やっぱ、こんな男は元々司祭には不向き？

■□■なぜこんな嘘を？小さな嘘からあれよあれよの展開に！■□■

邦題を『ああ無情』、原題を『レ・ミゼラブル』とする、ヴィクトル・ユゴーの小説は映画はもとより、ミュージカルも世界的に大ヒットしたが、主人公ジャン・バルジャンの波乱万丈の物語が生まれたのは“小さな盗み”からだった。それと同じように、新生活を始めるために到着した小さな村の教会で、ダニエルがマルタ（エリーザ・リチェムブル）という少女についた小さな嘘から、本作の物語が始まっていく。その嘘は「僕は司祭だ」というものだが、マルタがそれを信じなかったのは当然。しかし、「証拠を見せろ」と言われるままに、ダニエルが持っていた司祭服を見せると・・・？

そんな偶然から生まれた“小さな嘘”でも、それを維持していくためには“更なる嘘”を積み重ねていかなければならないのは当然。「なりすまし」をテーマにした映画はたくさんあるが、少年院を仮退院したばかりのダニエルがこの小さな村でヴォイチェフ神父に対して「僕はトマシュ神父だ」と信じ込ませ、トマシュ神父になりすますことができたのは、少年院時代にカトリックをしっかりと学びながら、本物のトマシュ神父の下でミサのまとめ役を任される体験をしていたからだ。神父には“告解”というダニエルが一度も体験したことのないお仕事もあるが、情報化社会の今、それくらいはスマホで“手引き”を勉強すればできること。ミサだって形式的なやり方は決まっているが、トマシュ神父の真似をすれば簡単だし、たまに独自路線のミサをやれば、かえって信者たちの人気を得ることに。

このようにして、ヴォイチェフ神父が重いアルコール依存症の治療のためにリハビリで村を留守にする間、ダニエルはトマシュ神父になりすまし、順調にその職務を全うするこ

とに大成功！今やダニエルは、この小さな村のカリスマ司祭として順風満帆だが・・・。

■□■この献花台は？被害者は？この悲劇の犯人は？■□■

ダニエルが村に入った時から気になっていたのが、6人の若者の写真を飾った献花台。これは小さな村で起きた交通事故によって、マルタの兄と友達に乗っていた車ともう一台の車が衝突し、合計7人が死亡した悲劇を悼むものだ。しかし、死者は7名なのに、なぜ写真は6名しかないの？それは、この事故がもう一台の車の運転手スワヴェクの飲酒運転によるものだと、被害者の遺族たちは信じ込んでいたためらしい。そのため、スワヴェクの亡骸は司祭から埋葬を拒否された妻・エヴァが自宅に持ち帰り、彼女は村八分の扱いを受けていた。しかし、その事故原因はホントなの？そんな単純な疑問を持ったダニエルが、マルタと共にエヴァを訪問してみると・・・。

私は弁護士登録以降ずっと、交通事故の案件を示談、裁判の両方とも数多く処理してきたから、本作中盤のこんな問題を聞くと、「さっさと当該事故の刑事記録の取り寄せ、少なくとも実況見分調書の取り寄せをすればいいのに」と思ってしまう。しかし、それでは面白い映画にならないため、マテウシュ・パツェヴィチの脚本はその交通事故の真相をちょっとしたミステリー事案に仕立てている。しかし本作では、事件の少し前にマルタの兄がマルタに送ってきた動画によって、意外にあっけなく当該事件の原因、すなわち酒を飲んでいたのはスワヴェク？それとも、マルタの兄たち？が明らかにされるので、ミステリーとしてはイマイチ。しかし、本作はミステリー映画ではないので、その辺の不満は横に置き、その真相を知った村のカリスマ司祭、ダニエル（＝トマシュ神父）のその後の行動に注目！

■□■この交通事故の真相は？それを暴くことの功罪は？■□■

この交通事故の真相は、もう一台の車の運転手スワヴェクの飲酒運転によるものではなく、逆にマルタの兄たち6人が飲酒運転していたことによるもの。ダニエルにはそんな“真相”が明らかになったが、それをあえて今、ダニエルが明らかにすることに何の意味があるの？それは6人の遺族たちの感情を逆なでするだけなのでは？当然そんな考えもあったが、あえてダニエルはミサで集めたお金を「まだ埋葬されていないスワヴェクの葬儀に使う」と宣言することに。そんな宣言に、遺族をはじめ多くの村人たちが驚いたのは当然だが、それ以上に強く反発し、ダニエルを強く非難するに至ったから、さあ、ダニエルはどうするの？

そこでダニエルが証拠として見せたのは、マルタのスマホに収められていた前記の動画の他、マルタの母親たち遺族がエヴァに対して送付した、憎しみや怒りに満ちた数々の罵詈雑言の手紙が入った段ボールの箱だ。しかも、エヴァの説明によれば夫のスワヴェクは当時4年間断酒をしており、検視でも陰性だったから、この交通事故の処理は一体どうなっているの？

ダニエルがはじめてやってきたこの村で、トマシュ神父になりすました上、交通事故に

ついてここまで真相を解明できたのはマルタの協力があり、エヴァが重い口を開いたためだが、逆にそれによって悪者になってしまったのがマルタの母親。そのため、家に入れてもらえなかったマルタはその晩、やむなくダニエルを訪れ「ここに泊めて！」と大胆発言、大胆行動に及んだが、さて、その後の展開は？

■□■こんな男には会いたくなかったが。ダニエルの選択は？■□■

ジャン・バルジャンはその後市長という公職に就き忙しい日々を送っていたが、ある日、馬車の下敷きになった男を救い出すという目立った行動をとってしまったため、執拗に彼を追跡していたシャベール警部の目に留まることになった。しかし、今ダニエルは完全にトマシュ神父になりすましていたから、その正体がバレる心配はなし。

本作中盤はずっとそんな展開だったが、ある日ダニエルが告解室に入ると、そこで聞こえてきたのは同じ少年院に入っていたピンチェル（トマシュ・ジエンテク）の声だったから、ビックリ！これは、製材所で働いていたピンチェルが、招待されてその見学にやって来たトマシュ神父を見て、一目でこれはダニエルだと分かり、脅迫ネタにしようとしたためだ。ピンチェルが言うように、なりすましを村人にばらされるのは困るが、そうかといって要求された金を準備することなど到底不可能だ。さあ、トマシュ神父＝ダニエルはどうするの？彼の選択は？

■□■本物の神父も登場！彼のアドバイスは？最後の選択は？■□■

本作後半のテーマは献花台にまつわるストーリーだが、そのポイントは、村人の反対にもかわらず、ダニエルがスワヴェクの葬儀を強行するの否かになっていく。そして、その点では、マルタの母とエヴァ以外に“村の有力者”も交えた席での話し合いの行方が焦点になる。ところが、本作ラストにかけては、もう一人重要な人物がダニエルの前に登場してくるので、それに注目！

それは、ホンモノのトマシュ神父だ。トマシュ神父はダニエルがしていることに悲しみと怒りを覚えながらも、周囲に悟られぬよう振舞ってくれたから、これは穏当。そして、「ミサは自分がやるから、おまえはすぐに荷造りを」と促したのも穏当だ。ところが、一見それに従うかに見えたダニエルがとった、その後のあつと驚く行動は？

日本人のほとんどは仏教徒だが、そのほとんどは葬式仏教に過ぎない。また、キリスト教の信者も少ないから、本作に見るポーランド人の信仰心はほとんど理解できないかもしれない。しかし、それを差し引いて考えても、少年院を仮退院したダニエルが、トマシュ神父になりすますという、本作の実話に基づくストーリーは十分理解できる。また、そのストーリーも、『レ・ミゼラブル』ほどではないけれども、それなりの波乱に富んでおり面白い。しかし、本作ラストの最大のクライマックスはどうだろうか？ダニエル役を演じたバルトシュ・ビエリニアは300人以上の候補の中から選ばれたそうだが、そんな俳優が演じた主人公ダニエルが見せるラストのパフォーマンス（？）はあつと驚く何とも意外なものだ。もちろん、それはここでネタバレにはできないので、あなた自身の目でしか

りと！

2021（令和3）年1月25日記